研究タイトル：

ドイツを中心とした技術哲学の歴史的研究

氏名：	北野　孝志　／　KITANO　Takashi	E-mail：	t-kitano@toyota-ct.ac.jp
職名：	教授	学位：	博士（文学）
所属学会・協会：	日本哲学会，日本現象学会，応用哲学会，中部哲学会		

キーワード：	技術哲学，ドイツ，思想史，技術倫理
技術相談 提供可能技術：	

研究内容：ドイツを中心とした技術哲学の歴史的研究

本研究は、1877 年に E.カップが初めて「技術の哲学」という表現を用いて著書を刊行して以降、長い伝統を持ってドイツで展開されてきた技術哲学を歴史的に振り返ることにより、技術を哲学の中心テーマの 1 つとして据えることの意義を明らかにするものである。また、そうした技術哲学の伝統が、ドイツにおける技術倫理の考え方にどのような影響を及ぼしているのかについても明らかにする。そして、日本においても技術を哲学研究の中心概念の 1 つとしつつ、そうした技術哲学に基づいて技術倫理の問題を新たに考え直すことを意図したものである。

まずドイツで刊行されてきた技術哲学に関する概説書やその他の欧米諸国や日本で技術哲学に触れられている文献などを参考にすることにより、技術哲学の歴史を概観し、その上で具体的にそれぞれの思想を考察する。その際、歴史的な背景がそれぞれの思想とどのような関係にあるのかも考えながら、検討する。前述した技術哲学の創始者カップや、20 世紀前半のドイツにおける技術哲学を本質的に規定したとされる F.デッサウアーなど、ドイツの技術哲学の歴史において欠かせないものの、日本ではあまり詳細に扱われてはいない思想が検討の対象となる。また、日本でも紹介され翻訳もあるカッシーラーやハイデガー、ヤスパース、ゲーレンといった哲学者の技術論も、技術哲学の伝統の中に位置づけて考察される。そして、現代のドイツにおいても大きな影響力を持っている J.ハーバーマスや H.ヨナスなどの思想も考察の対象となる。さらには、応用倫理学者としても活躍し、技術倫理の研究にも従事している H.レンク、G.ローポール、C.フービッヒといった研究者たちがそれ以前の思想をどのように吸収し、それぞれの思想を展開しているのかも明らかにする。さらにそれと関連して、ドイツ技術者協会（VDI）がこうした哲学者たちの思想とどのような関係にあるのについても、その歴史的背景を踏まえて明らかにする。このように、本研究ではドイツの技術哲学が中心ではあるものの、その他の欧米諸国や日本における技術に関する思想にも目配せしつつ、時代的背景の中でどのような関係があるのかについても考察する。

前述したように、本研究を通して技術が日本の哲学研究においても中心テーマとして据えられるということが期待される。現代の社会や文化において、技術は切っても切り離せないほど重要な位置を占めている。本研究は、技術が現代の社会や文化を本質的に規定するものとして、哲学研究の中心に据えられるための基礎研究となる。一方、本研究の副次的効果として、技術倫理の研究を進めていく上で新たな展開をもたらすことにつながるという意義があるように思われる。前述したように、ドイツにおける技術倫理の考え方には日本やアメリカの考え方にはない独創的な点がみられるが、その意義は必ずしも理解されていない。そこで、ドイツの技術倫理の考え方の背景にある技術哲学の伝統を歴史的に考察することにより、どのように影響しているのかを明らかにし、それによって技術倫理の考え方を問い直すことは我々にとっても有効であるように思われる。このように、本研究は日本における技術倫理の考え方を検討し直すための基礎という意義も持っている。

提供可能な設備・機器：

名称・型番（メーカー）	